

社会的行動の適切さ判断 — 義務を基盤とする道德観と言動の不一致解消 —

伊 坂 裕 子 ^{*1}
和 田 万 紀 ^{*2}

Judgments of appropriate social behavior: Duty-based or consistency orientation?

Hiroko ISAKA ^{*1}
Maki WADA ^{*2}

Abstract

Judgment of appropriate social behavior differs in different cultures. Studies have identified two main classes of cultural views concerning the self: a) an independent view of self, and b) an interdependent view of self. With respect to moral reasoning, interdependent views of self are assumed to be linked to duty-based moral beliefs, in which duty, such as fulfilling one's role expectations, is the fundamental justification for moral rightness, whereas independent views of self are linked to right-based moral belief, in which human rights, such as the right to equal opportunities, is fundamental. It is assumed that in collectivistic cultures, such as Japan, people have an interdependent view of self and duty-based moral beliefs. It has also been pointed out that Japanese react differently to a discrepancy between attitudes and behaviors and are not motivated toward consistency as much as Western people. In the present study, we examined the choices of social behaviors in situations in which one's opinion is different from significant others. Results showed that Japanese college students tend to choose the behavior which they think of as a duty rather than the behavior they think typical Japanese would choose. Moreover, we showed that the judgment concerning appropriate behavior may be different according to one's field of studies, even in Japan. The implications are discussed in terms of cultural views of self.

さまざまな場面で個人の行動の選択に影響を与える要因のひとつに、その場面における行動の適切さの判断がある。また、文化心理学では、文化的自己観による影響が指摘されている。

文化的自己観と道德的判断

人々の行動や価値観について、文化間での違いについては多くの研究が蓄積されてきた。中でも、現在の文化心理学の領域で大きな影響を与えたのが、Markus & Kitayama(1991)の文化的自

己観の理論である。この理論に触発され、さまざまな研究が行われてきた。その結果、文化により自己観が異なり、それがさまざまな行動に影響を与えることが示されてきた。道德的判断についても、その影響を考えることができる。

Kohlberg(1971)は道德的判断の発達には文化に共通で、正義や公平性などの普遍的な概念により判断する段階をもっとも高次のものとしている。しかし、1980年代になると、道德的判断の発達が普遍的であることに疑問が呈され、文化による影響も指摘されるようになった。例えば、アメリ

*1 日本大学国際関係学部 准教授 Associate Professor, College of International Relations, Nihon University

*2 日本大学法学部 教授 Professor, College of Law, Nihon University

カナなど個人主義の文化においては、個人は相互独立的自己観を持つとされている。相互独立的自己観では、個人の自己は状況や周囲の他者との関係に依存せず、相互に独立している。そのため、状況に関わらず個人の価値観や意見を表明、優先する個人志向的判断が行われ、それが個人の権利を基盤とする (right-based) 道徳観につながると考えられる。一方、日本など集団主義の文化においては、個人は相互協調的自己観を持つとされている。相互協調的自己観では、個人の自己は他者の自己と明確に区別されず、周囲の他者との自己の境界があいまいとなる。そのため、「空気を読む」など他者との関係性に依存した関係志向的判断が行われ、それが他者への義務を基盤とする (duty-based) 道徳観につながると考えられる。

一方、Markus & Kitayama(1991)らは、これらの文化に特異的な行動や判断は、個人がその文化の中で自然と身に着けた個人的選好の結果から生じると考えている。しかし、文化的自己観の違いがどこから生じるのかという点についての検討は、十分にされているとはいえない。その点に関して、山岸(2014)は、文化への制度的アプローチを展開している。このアプローチでは、個人の表出する文化特定の行動は、周囲の人が持つと信じる価値観に合わせて行動する、という方略的なものであると考える。例えば、橋本(2011)では、日本人大学生は、相互協調的自己より相互独立的自己を理想的と考えていながら、自分自身は相互協調的であると考える。さらに、世間一般の人たちは自分たちよりももっと相互協調的である、ととらえていることを示した。そして、日本人が相互協調的な行動をとるのは、個人が相互協調的な信念を共通にもっているというより、「他者は相互協調的な信念をもっている」と考える、他者に関する信念が大きな要因である、と考えている。

文化への制度的アプローチでは、日本など社会的関係が固定的な社会では、現在の対人関係の中で受け入れられることが重要となるため、集団主義的秩序が形成され、他者に対する義務を基盤とした (duty-based) 道徳観が育つと想定される。一方、アメリカなど新たな社会関係を構築する機会が多く、他者との関係が流動的な社会では、個

人主義的秩序が形成され、個人の権利を基盤とした (right-based) 道徳観が育つと考えられる。

重要他者と意見の相違がある場面の行動の文化差

Iwao(1997)は、重要な他者との意見の違いがある場面で、好ましいと考える行動を、アメリカと日本で比較した。例えば、自分の娘が異なる人種の人と結婚するのは許せないと考えている親が、娘が婚約者として人種の異なる相手を迎えてきた場面での行動について、複数の選択肢の好ましさの順番をつけさせた。この場合、“内心は娘の結婚を認めないが、その場では結婚に賛成しているように言う”という「言動に不一致のある行動」が、日本ではもっとも好ましいとされた。しかしこの行動は、アメリカではもっとも好ましくないとされたことを報告した。これは、相互独立的自己観を持ち、二律背反の絶対的な価値を持つアメリカ文化と、相互協調的自己観を持ち、個人がさまざまな役割に応じてふさわしい行動を演じ分けると考える日本文化の違いとして考えられている。

しかし、Iwao(1997)では、同じ場面でアメリカ人がもっとも好ましいと選択した行動は、“内心ショックで怒りを感じているが、婚約者には穏やかに接し、できるだけ歓待する”という「言動の不一致」のある行動であった。相互独立的自己観をもつアメリカ人であっても、言動の不一致のある行動をもっとも好ましいと考えている、という矛盾が示されている。

また、葛藤場面解決についての大淵・福島(1997)の多目標理論に基づいて、羅(2008)は対人葛藤場面における解決目標と解決方略について、日本人と中国人の比較を試みた。羅(2008)は、葛藤解決目標としては、自尊心やプライドを回復するなどの社会的目標と、金銭的に優位になりたいなどの経済的目標、相手と良い関係を維持したいなどの関係目標の3因子を抽出している。また、問題解決方略として、攻撃的方略、主張的方略、抑制的方略の3種を設定した。各方略は、2～4の下位項目に分かれる。攻撃的方略は、叩く、怒鳴るなど相手に攻撃性を示す直接的攻撃と間接

攻撃に分かれる。間接攻撃は、表情や身振りなどによる表情攻撃、裏で第三者に不満を漏らす背後攻撃、相手のとの関係を徐々に絶つ断絶攻撃を含む。主張的方略は、説得や取引など言葉を用いて自分の考えや感情を率直に伝える直接的主張と直接いわないで、暗示的に自分の考えや感情を伝える間接的主張に分かれる。抑制的方略は、相手との関係を重視するため自分の要求や感情を抑える関係性重視抑制と騒ぎになることが恥ずかしいため、自分の要求や感情を抑える騒ぎ回避抑制にわかれる。この中で、葛藤解決目標としては、中国人は日本人より社会的目標が強く、また、日本人は中国人より関係目標が高いことを示している。そして、たとえば、意見が対立する場面では、日本人は間接的主張や関係重視抑制の方略を多く使用するのに対し、中国人は直接的主張の方略を多く使用していることを示している。中国は日本と同様に相互協調的自己観を持つと考えられるが、葛藤解決目標や解決方略の差を説明するのに、自己観の違いだけでは、不十分であると考ええる。

一方、道德的直観についての近年の研究では、道德的直観は試行錯誤を繰り返しながら、その社会の中で許されること、許されないことを学習する、すなわち、文化的文脈の中で発達するとしている。そのため、同一の文化でも所属する集団によって、どのような行動を適切と考えるかということが異なると考えられる (Haidt, 2001)。

そこで、本研究では日本文化の中で、個人の行動の選択に影響を与える要因を検討するとともに、行動の適切性の判断に影響を与える要因として、個人の持つ専門的知識をとりあげる。本研究では、国際関係学と法学を専攻する学生を対象として、Iwao(1997)にならい、重要な他者との意見の違いがある場面での行動の適切性判断における専門的背景の影響を検討する。

方 法

調査対象者

N大学国際関係学部学生、153名（男性82名、女性71名）、法学部学生、92名（男性62名、女性30名）、合計245名。

調査内容

設定場面 Iwao(1997)で使用された場面・行動などを参考に、他者と意見の相違のある場面のシナリオを3場面作成した（付録1～3）。

場面A：死刑反対論者の前で、それを知らない同僚が死刑賛成の意見を表明する。

場面B：自分でも克服できない人種偏見を持っている親の娘が婚約者として人種の異なる相手を連れてきた。

場面C：ルール重視の人が同僚とハイキングにでかけ、その同僚が立ち入り禁止区域に入ろうとする。

場面Aと場面Bは、Iwao(1997)で用いられた3場面のうちの2場面である。場面Cは、新たに作成した。そして、各場面の登場人物が日本名である日本名バージョンと英語名である英語名バージョンを作成した。

評価視点と評定 それぞれの場面において、とりうる行動の選択肢を場面Aでは8項目（付録1）、場面B,Cでは、それぞれ5項目作成した（付録2,3）。場面Aと場面Bの行動の選択肢は、Iwao(1997)で用いられたものを使用した。各行動について、次の5つの評価視点から5段階で評定を求めた。

- 1) 自分が行うであろうと思う程度について、「絶対に行わない」～「必ず行う」の5段階評定。
- 2) 典型的な日本人（または、アメリカ人）が行うと思う程度について、「絶対に行わない」～「必ず行う」の5段階評定。
- 3) よりよい関係を目指すために、または、関係の悪化をさけるために適切だと思う程度について、「とても不適切」～「とても適切」の5段階評定。
- 4) 社会的に義務や責任を果たしていると思う程度について、「全然そう思わない」～「とてもそう思う」の5段階評定。
- 5) 個人の自由やプライバシーを守ると思う程度について、「全然そう思わない」～「とてもそう思う」の5段階評定。

結果と考察

各場面における適切な行動の平均

場面Aと場面Bは、Iwao(1997)と共通の場面、行動を設定した。Iwao(1997)では行動の選択肢にもっとも好ましいものから順番をつけさせている。そこで、Iwao(1997)と結果を比較するため、本研究の適切性についての評定をとりあげた。本研究の場面ごとの行動の選択肢についての適切性の評定結果を付録に示した（付録1～3）。

本研究の場面A（付録1）では、日本名バージョンでも英語名バージョンでも、両学部の学生がもっとも適切と判断したのは、「いつも通りの笑顔で、相手の話を静かに注意深く聞く」行動、2番目に適切であると評定したのは、日本名バージョン、英語名バージョンともに、「相手の言うことにも一理あると考え、自分の意見が間違っている可能性があると考える」行動であった。

Iwao(1977)の場面Aでは、本研究で2番目に適切と判断されている「相手の言うことにも一理あると考え、自分の意見が間違っている可能性があると考える」行動は、日本人の42.2%、アメリカ人の59.2%が、もっとも好ましい行動として選択している。もっとも好ましい行動として選択されたのが、次に多いのは、日本人では、「いつも通りの笑顔で、相手の話を静かに注意深く聞く」行動で23.0%がもっとも好ましいとして選択している。この行動は、アメリカ人では第3位ではあるが5.9%に選ばれたに過ぎない。アメリカ人の2位は「自分の意見を表明し、相手の意見を変えようとする」で、28.4%、日本人では第3位で15.6%であった。

場面Aについての適切性に関する本研究の結果は、Iwao(1997)で日本人が選んだ好ましい行動とほぼ同様の結果と考えてよい。

場面B（付録2）でもっとも適切であると評定した行動は、両学部、日本名、英語名の両バージョンで「内心、ショックで怒りを感じるが、娘が連れてきた男性に笑顔を見せ、彼を楽しませようと努力する」行動である。この行動は、Iwao(1977)では、アメリカ人によってもっとも好ましいとして選ばれた1位（57.4%）であった。

一方、日本人によっては、もっとも好ましい行動の3番目（17.6%）であった。本研究で2番目に適切と判断されたのは、両学部、日本名・英語名の両バージョンで「人種偏見を持っていないようにふるまい、笑顔で行動する」であった。この行動は、Iwao(1997)では、アメリカ人によってもっとも好ましいとされた2位（20.7%）である。しかし、日本人によっては、1.9%のみが選択したもっとも選択数の少ない行動である。場面Bに関しては、Iwao(1997)とかなり異なる結果となったといつてよいだろう。

このようにIwao(1997)と同じ2場面であるが、適切性についての判断は、場面AはIwao(1997)とほぼ同様の結果、場面Bは異なる結果となった。

場面C（付録3）は本研究で新しく作成した場面であるため、Iwao(1997)との比較はできない。場面Cに関しては、場面A、Bとは異なり、両学部ともに日本名バージョンと英語名バージョンで適切な行動が異なる傾向があった。日本名バージョンでは、両学部ともにもっとも適切性が高かったのは、「安全は自己責任と考え、近藤さんと一緒に岩場の先端まで行ってみる」行動であった。一方、英語名バージョンでもっとも適切性の判断が高かったのは、両学部ともに「安全に景色を楽しむため、遊歩道に留まるように近藤さんを説得する」行動であった。両学部ともに、日本人にとって適切な行動は相手にあわせる行動、アメリカ人にとって適切な行動は自分を主張する行動といえよう。

各場面における行動の因子

日本名のシナリオで、各行動を自分が行う程度の評定に基づき、各場面の行動の因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を行った。その結果、場面Aは、相手の意見を聞かなかったふりをするなどの場優先行動、自分の意見を表明し相手を説得しようとするなど自分の意見を優先する自分優先行動、相手の意見を一理あると考えるなど相手の意見を優先する相手優先行動の3因子を抽出した（Table 1）。自分優先行動は、自分の意見や信念を表明している点で、言動が一致して

Table 1 場面A(自分)の因子分析

	場優先	自分優先	相手優先
5 鈴木さんと自分とは、意見が同じであるかのようにふるまう	.783	.060	.157
1 鈴木さんが話したことを聞かなかったふりをする	.724	-.014	-.195
8 鈴木さんに自分の意見や自分の市民活動について話すことをやめる	.649	.035	.155
6 鈴木さんについての自分の考えを変え、鈴木さんは信頼できないと思う	.627	.454	-.260
2 自分の意見を表明し、鈴木さんの意見を変えようとする	-.126	.840	.063
4 その場にいる第三者に向かって「あなたは、私に賛成ですよ」という	.282	.726	-.085
7 鈴木さんの言うことにも一理あると考え、自分の意見が間違っている可能性があると考え	-.046	.126	.805
3 いつも通りの笑顔で、鈴木さんの話を静かに注意深く聞く	.089	-.177	.745

Table 2 場面B(自分)の因子分析

	相手 - 自分
人種偏見を持っていないようにふるまい、笑顔で行動する	.828
率直に自分の不快感を表現する	-.816
内心、ショックで怒りを感じるが、娘が連れてきた男性に笑顔を見せ、彼を楽しませようと努力する	.785
娘と彼に、自分は結婚に反対であると、率直に述べる	-.760
自分では彼らの結婚を絶対に許さないと思っているが、彼らに対しては結婚に好意的であると話す	.619

Table 3 場面C(自分)の因子分析

	相手 - 自分
安全に景色を楽しむため、遊歩道に留まるように近藤さんを説得する	-.824
ルールを守るように、近藤さんを説得し、遊歩道に留まる	-.809
遊歩道を外れないことはルールで決まっているわけではないので、近藤さんと一緒に岩場に出る	.804
安全は自己責任と考え、近藤さんと一緒に岩場の先端まで行ってみる	.787
近藤さんの提案を聞かえなかったふりをして、そのまま遊歩道を進む	.403

いる行動、場優先行動は、言動に不一致のある行動といえよう。相手優先行動は、自分の意見と反対の意見を受容しようとする行動である。

他の2場面は、ともに1因子構造と考えられる。場面Bは、人種偏見を持っていないようにふるまい、笑顔で行動するなど言動に不一致のある相手優先行動が正の負荷量を持つのに対し、率直に自分の不快感を表現するなど言動一致の自分優先行動が負の負荷量を持つ(Table2)。また、場面Cも相手の意見を受け入れて一緒に岩場に出る相手優先行動が正の負荷量を持つのに対し、相手を説得する自分優先行動が負の負荷量を持つ(Table3)。両場面とも、相手優先行動(言動不一致)―自分優先行動(言動一致)の一次元となった。

日本名シナリオの自分が行う程度の判断から抽出された因子であるが、これをもとに、日本名、英語名シナリオの各評価視点について、下位尺度

を作成した。場面Aについては3つの下位尺度、場面B、Cについては、得点が高い方が相手優先行動となるよう、負の負荷量を持つ項目については、逆転処理を行い、それぞれ1尺度とした。

各評価視点における下位尺度の日米シナリオ、専門性の影響

各評価視点の下位尺度について、 α 係数と、シナリオの登場人物(日本名、英語名)と専門性(国際関係学部、法学部)別の平均値をTable4～8に示す。場面Aの3尺度については、各因子に含まれる項目数が少ないため、 α 係数が比較的低かった(α s=.352～.713)が、他はおおむね高い内的一貫性(α s=.671～.825)が得られた。日本名バージョンシナリオの自分が行う評定による因子分析に基づいた下位尺度であるが、この下位尺度を他の評価視点、英語名バージョンに使用しても問題ないと判断した。

場面Aの3尺度、場面B、場面Cについて、評価視点ごとに登場人物と専門性の2要因の分散分析を行った（Table4～8）。その結果、典型性の

評定（Table5）では、場面Cを除いて登場人物の主効果がみられた（ $F_s(1, 240)=53.153 \sim 180.857$, $ps<.001$ ）。場面Aの場優先、相手優先、場面B

Table 4 自分の行動

		α	国際 N=152		法 N=92		F値		
			平均	SD	平均	SD	登場人物	学部	交互作用
場面A場優先	英語名	0.502	2.28	0.68	2.44	0.81	2.508	1.695	0.055
	日本名	0.661	2.47	0.78	2.57	0.87			
場面A自分優先	英語名	0.503	2.22	0.72	2.11	0.66	0.714	1.034	0.020
	日本名	0.629	2.13	0.76	2.04	0.79			
場面A相手優先	英語名	0.352	3.50	0.72	3.72	0.72	0.017	4.425 *	0.004
	日本名	0.534	3.49	0.86	3.70	0.78			
場面B相手優先	英語名	0.815	3.07	0.76	2.78	1.06	0.546	5.243 *	0.014
	日本名	0.825	3.15	0.84	2.89	1.06			
場面C相手優先	英語名	0.772	2.58	0.69	2.09	0.75	0.044	18.760 ***	0.388
	日本名	0.776	2.54	0.72	2.17	0.79			
*** p<.001		** p<.01			* p<.05				

Table 5 典型性

		α	国際 N=152		法 N=92		F値		
			平均	SD	平均	SD	登場人物	学部	交互作用
場面A場優先	英語名	0.642	2.24	0.86	2.10	0.90	180.268 ***	0.875	4.554 *
	日本名	0.575	3.47	0.79	3.81	0.74			
場面A自分優先	英語名	0.503	3.34	0.82	3.36	0.84	53.153 ***	0.003	0.013
	日本名	0.411	2.57	0.77	2.57	0.80			
場面A相手優先	英語名	0.385	2.73	0.90	2.54	0.80	94.526 ***	1.142	0.395
	日本名	0.505	3.73	0.79	3.68	0.80			
場面B相手優先	英語名	0.773	2.42	0.85	2.05	0.68	180.857 ***	0.367	8.133 **
	日本名	0.825	3.58	0.90	3.83	0.76			
場面C相手優先	英語名	0.671	3.11	0.63	2.97	0.84	0.040	0.001	1.944
	日本名	0.776	2.99	0.81	3.13	0.84			
*** p<.001		** p<.01			* p<.05				

Table 6 適切性

		α	国際 N=152		法 N=92		F値		
			平均	SD	平均	SD	登場人物	学部	交互作用
場面A場優先	英語名	0.516	2.76	0.92	2.88	1.01	0.446	0.568	0.037
	日本名	0.675	2.87	1.02	2.94	1.01			
場面A自分優先	英語名	0.589	1.96	0.66	1.71	0.59	0.121	4.728 *	0.169
	日本名	0.713	1.95	0.91	1.78	0.62			
場面A相手優先	英語名	0.516	3.85	0.83	4.33	0.75	0.128	19.453 ***	0.036
	日本名	0.590	3.91	0.82	4.35	0.68			
場面B相手優先	英語名	0.728	3.62	0.79	4.09	0.74	0.058	4.050 *	5.896 *
	日本名	0.752	3.85	0.75	3.80	0.94			
場面C相手優先	英語名	0.709	2.79	0.82	2.66	0.82	1.820	0.302	0.463
	日本名	0.685	2.86	0.67	2.87	0.81			
*** p<.001		** p<.01			* p<.05				

Table7 義務

		国際 N=152				法 N=92		F値		
		α	平均	SD	平均	SD	登場人物	学部	交互作用	
場面A場優先	英語名	0.658	2.28	0.84	2.09	0.68	0.002	1.871	0.202	
	日本語名	0.667	2.24	0.80	2.14	0.85				
場面A自分優先	英語名	0.621	2.32	0.82	2.24	0.73	0.418	1.341	0.151	
	日本語名	0.553	2.29	0.81	2.13	0.79				
場面A相手優先	英語名	0.701	3.43	0.98	4.20	0.83	0.019	28.396 ***	0.764	
	日本語名	0.616	3.52	1.01	4.07	0.84				
場面B相手優先	英語名	0.525	3.26	0.65	3.46	0.66	5.816 *	1.373	0.698	
	日本語名	0.697	3.10	0.84	3.14	0.80				
場面C相手優先	英語名	0.726	2.20	0.80	1.82	0.59	0.037	22.957 ***	0.736	
	日本語名	0.757	2.26	0.76	1.71	0.65				
*** p<.001		** p<.01		* p<.05						

Table 8 自由

		国際 N=152		法 N=92		F値			
		α	平均	SD	平均	SD	登場人物	学部	交互作用
場面A場優先	英語名	0.463	2.69	0.87	2.88	0.77	2.267	0.753	0.628
	日本名	0.473	2.95	0.85	2.96	0.85			
場面A自分優先	英語名	0.632	2.11	0.79	1.95	0.73	0.035	4.532 *	0.300
	日本名	0.665	2.15	0.81	1.87	0.74			
場面A相手優先	英語名	0.552	3.60	0.87	4.03	0.77	0.024	15.511 ***	0.000
	日本名	0.649	3.61	0.86	4.05	0.84			
場面B相手優先	英語名	0.72	3.12	0.80	3.34	0.82	0.009	1.457	0.813
	日本名	0.681	3.22	0.76	3.25	0.80			
場面C相手優先	英語名	0.606	2.72	0.64	2.90	0.68	1.135	4.297 *	0.011
	日本名	0.429	2.82	0.55	2.98	0.67			
*** p<.001		** p<.01		* p<.05					

相手優先行動は、アメリカ人の典型的行動と比較して、日本人の典型的行動と考えられている。これらは、すべて自分の意見とは異なる相手の意見に合わせた行動で、本音と建前のような言動に不一致がある行動である。一方、場面Aで自分の意見を主張する自分優先行動は、日本人と比較してアメリカ人の典型的行動と考えられていた。これらの結果は、日本人の相互協調的自己観、アメリカ人の相互独立的自己観と一致した行動を典型的と考えていることを示している。これらが、ステレオタイプを形成していると考えられる。

また、場面A 場優先行動 ($F(1, 240)=4.554$, $p<.05$), 場面B 相手優先行動 ($F(1, 240)=8.113$, $p<.01$) は、交互作用も有意であった。場面Aで相手と同じ意見であるかのようにふるまうなど、

自分の意見を抑え、その場の雰囲気を優先する場優先行動を日本人の典型と考える程度は、国際関係学部と比較して法学部の方が高く、逆にこの行動をアメリカ人の典型と考える程度は法学部の方が低い。さらに、場面Bで相手を優先する行動を日本人の典型と考える程度は国際関係学部に比べて法学部の方が高く、逆にアメリカ人の典型と考える程度は法学部の方が低い。

両場面ともに、自分の本音を抑え場の雰囲気や相手を優先するような本音と建前がある行動を典型的な日本人が行うと考える程度は法学部が高く、典型的なアメリカ人が行うと考える程度は法学部が低いことが示された。また、法学部の学生に比べて国際関係学部の学生は、典型的な日本人が行うと考える程度と典型的なアメリカ人が行う

と考える程度の間の差が少ない。これらの点から、法学部に比べて国際関係学部の学生がステレオタイプに一致した判断をする傾向が低いと考えられる。

一般に、国際関係学部は、国際社会におけるさまざまな事象について教育・研究を行い、世界の多様な価値観を学習すると考えられる。本研究の対象となった大学の国際関係学部の教育目標は「N大学の教育理念・・・に基づき、世界の多様な価値観を正しく理解し、寛容性と探究心をもって、国際社会に貢献する志の高い人材を育成する」（N大学国際関係学部ホームページより）と、多様な価値観を理解することや寛容性などが強調されている。一方、法学部は、各種の法律を学ぶことが基礎と考えられ、本研究対象の法学部の教育研究上の目的も「法律の知識を基礎として、高水準の実践的な専門教育と国際的教養人としての教養教育に努め、高い倫理観と優れた人格を備えた法律的なものの考え方ができる人材を養成する」となっている（N大学法学部ホームページより）。このような点から国際関係学部は法学部に比較すると、さまざまな国や文化を学習すると考えられ、また、外国人と交流する機会が多いと考えられる¹⁾。そのような経験を通して、「○○人」という大きな社会的カテゴリーで認識していた集団に対して、○○人の中で、さらに細分化されたカテゴリーによる認識がされるようになったと考えられる。最終的には、○○人のようなカテゴリーではなく個人を問題とする姿勢を形成するに至るかもしれない。それが、法学部と比較して国際関係学部がステレオタイプ的な見方が低いことにつながった一因と考えることができる。

他の評価視点では、義務の評定（Table7）で場面Bの相手優先行動（ $F(1, 240)=5.816, p<.05$ ）を除いて、登場人物の主効果はみられなかった。

一方、専門性に関しては、典型性評定以外のさまざまな視点で主効果がみられた。

自分が行う行動（Table4）では、すべての場面の相手優先行動に専門性の主効果（ $F_s(1, 240)=4.425 \sim 18.760, p_s<.001 \sim .05$ ）がみられた。場面B,Cでは、法学部の学生に比べて国際関係学部の学生が相手優先行動を自分が行うとする評定が高

い。特に、場面Cの相手優先行動にその傾向が強い。場面Cの相手優先行動は標識の注意を無視して遊歩道の外に出るというルール逸脱行動となることが影響していると思われる。一方、場面Aの相手優先行動は国際関係学部に対して、法学部の学生が自分が行うと思う程度が高い。場面Aの相手優先行動は、死刑受容を主張する相手の意見を受け入れるというものである。法学部の学生にとっては、現行の法律を受け入れるものであることが影響していると思われる。

適切性の判断（Table6）では、場面A 自分優先行動、場面A 相手優先行動、場面B 相手優先行動に専門性の主効果（ $F_s(1, 240)=4.050 \sim 19.453, p<.001 \sim .05$ ）、場面B 相手優先行動に交互作用（ $F(1, 240)=5.896, p<.05$ ）がみられた。場面Aで死刑賛成の相手の意見を受け入れる行動は両学部ともに適切と考えられているが、適切と考える程度は、国際関係学部に対して法学部が高い。逆に、死刑反対の自分の意見を優先する行動は、両学部ともに適切性の程度は低いが、国際関係学部より法学部の方が適切性をより低く判断している。現行の法制度の枠組みで適切性を考える法学部と多様な価値観や寛容性を重視する国際関係学部の専門性の違いを反映していると考えられる。場面Bの相手優先行動を適切と考える程度は国際関係学部では英語名バージョンに比べて日本名バージョンが高く、法学部では英語名バージョンが高い。国際関係学部ではアメリカにおける人種偏見の現実などに触れる講義もあり、その現実を反映した判断となった可能性が考えられる。

義務と考える程度（Table7）、自由を守ると考える程度（Table8）に関しても、両学部の専門性の違いを反映したと思われる有意差を得ることができた。場面Aで相手優先行動を義務と考える程度は、国際関係学部に対して法学部が高く、場

1) 調査対象大学の平成27年度の派遣留学生は、国際関係学部は106名、法学部は11名、受け入れ留学生数は、国際関係学部15名、法学部64名。

面C 相手優先を義務と考える程度は、国際関係学部が高い。これは、場面Aの相手優先行動は死刑賛成、場面Cの相手優先はルール逸脱となるということが関連していると思われる。

自由を守ると考える程度に関しては、国際関係学部比べて法学部は、場面A 相手優先行動、場面C 相手優先行動を自由を守ると考える程度が高い。一方、場面A 自分優先行動を自由を守ると考える程度は、国際関係学部が高い。

自分と異なる意見を受け入れる相手を優先する行動を自由を守ると考える傾向は法学部が強く、自己主張を自由を守ると考える傾向は国際関係学部が強いといえる。国際関係学部の学生が「自由を守る」と考えるのは、自分の自由であるが、法学部の学生が考える「自由」は、相手の自由、人権としての自由といえるかもしれない。

評価視点の相関

本研究の研究対象者は日本人大学生である。そこで、行動の選択に影響を与える判断を検討するために、日本人名のシナリオに基づき、場面ごとに自分が行う程度、適切性の判断と場面Aの3尺度と場面B、場面Cの各尺度との相関を求めた。

場面A(Table9)では、場優先行動(国際: $r=.314$, 法: $r=.293$), 自分優先行動(国際: $r=.314$, 法: $r=.293$)を自分が行うと考える程度は、両学部ともそれが適切であると考えられる程度と弱い～中程度の正の相関を示した。また、自分優先行動を行うと考える程度は、両学部とも日本人の典型的な行動と考える程度(国際: $r=.399$, 法: $r=.416$), 義務と考える程度(国際: $r=.315$, 法: $r=.487$)とも弱い～中程度の正の相関を示した。相手優先行動を自分が行うと考える程度は、両学部とも自由を守ると考える程度と中程度の相関を示した(国際: $r=.312$, 法: $r=.414$)。また、適切であると考えられる行動としては、場優先行動は両学部ともそれが自由を守ると考える程度と中程度の正の相関を示した(国際: $r=.456$, 法: $r=.390$)。自分優先行動や相手優先行動を適切と考える程度は、両学部とも義務と考える程度(自分優先 国際: $r=.320$, 法: $r=.423$ / 相手優先 国際: $r=.431$, 法: $r=.446$), 自由を守ると考える程度(自分優先

Table 9 場面A 自分が行う行動、適切性との相関

		自分			日本人 ¹⁾			適切性			義務			自由		
		場面A			場面A			場面A			場面A			場面A		
		自分優先	相手優先	場優先	自分優先	相手優先	場優先	自分優先	相手優先	場優先	自分優先	相手優先	場優先	自分優先	相手優先	場優先
自分	場優先	国際	.368**	.154	.139	.088	.021	.137	.293*	.314**	.179	-.023	.061	-.184	-.012	.002
		法	.347*	-.068	.088	.021	.019	.019	.293*	.314**	.109	-.158	.419**	-.025	.273	-.153
	自分優先	国際	.368**	1	.090	-.071	.399**	.039	.080	.494**	.494**	-.217	.061	-.184	.204	-.050
		法	.347*	1	-.224	-.023	.416**	.005	.267	.294*	.294*	-.062	.369*	-.206	.407**	-.321*
	相手優先	国際	.154	.090	1	.067	.155	.254*	-.243*	-.074	-.074	.230	-.022	.203	-.145	.312**
		法	-.068	-.224	1	.235	-.314*	.122	-.004	-.137	-.137	.240	-.142	.207	-.383**	.414**
適切性	場優先	国際	.314**	.080	-.243*	.074	.083	.044	1	.139	.257*	-.076	.236	-.016	.456**	-.013
		法	.293*	.267	-.004	.150	-.040	.233	1	-.013	.482**	.003	.236	-.171	.390**	-.152
	自分優先	国際	.179	.494**	-.074	-.255*	.348**	-.174	.139	1	-.572**	-.076	.201	-.247*	.530**	-.236*
		法	.109	.294*	-.137	-.093	.159	-.230	-.013	1	-.411**	-.065	.065	-.238	.684**	-.381**
	相手優先	国際	-.023	-.217	.230	.052	-.177	.146	-.076	-.572**	1	-.158	.431**	.431**	-.375	.317**
		法	-.158	-.062	.240	.477**	-.127	.426**	.003	-.411**	1	-.044	.446**	.446**	-.644**	.500**

** $p<.01$, * $p<.05$,

1) 「日本人」とは、典型的な日本人が行う程度の評定

Table10 場面B 自分が行う程度、適切性との相関

		自分	日本人 ¹⁾	適切性	義務	自由
自分	国際	1	.193	.203	.212	.272*
	法	1	.055	.065	.087	.289*
適切性	国際	.203	.181	1	.404**	.283*
	法	.065	.100	1	.283	.095

** p<.01, * p<.5,

¹⁾「日本人」とは、典型的な日本人が行う程度の評定

国際： $r=.530$ 、法： $r=.684$ / 相手優先国際： $r=.317$ 、法： $r=.500$ ）と中程度の正の相関を示した。

場優先行動は、相手との人間関係を重視した相互協調的な行動で、典型的な日本人が行うと考えられる。このような場優先行動を自分が行うのは、周囲の典型的な日本人がそうするからというより、それが、適切であると考えることと関連していると考えられる。また、自分の意見を表明する自分優先行動は相互独立的自己観を反映していると考えられるが、この行動を自分が行うのは、義務であり、適切であり、周囲の典型的な日本人もそうすると考える程度と関連していると考えられる。適切と考える行動は、周囲の典型的な日本人が行う行動というより、義務であったり、自由を守ると考える行動ということが示されている。

場面B(Table10)では、両学部とも、自分が行うと考える程度は、自由を守ると考える程度と弱い正の相関を示した（国際： $r=.272$ 、法： $r=.289$ ）。適切と考える程度は、国際関係学部では義務や自由を守ると考える程度と弱い～中程度の相関を示した（義務： $r=.404$ 、自由： $r=.283$ ）。法学部では、適切と考える程度と義務や自由を守ると考える行動に相関はない。

場面C(Table11)では自分が行うと考える程度は、義務と考える程度と中程度の相関（国際： $r=.345$ 、法： $r=.436$ ）、また、国際関係学部では適切性（ $r=.330$ ）とも中程度の相関を示した。適切性は、国際関係学部では自由を守ると考える程度と中程度の相関（ $r=.330$ ）を示した。

行動の選択には、その行動を適切と考えたり、義務と考えることが影響を与える可能性が示された。

各下位尺度における評価視点と専門性による影響
各場面における行動について、評価視点と学部に

Table11 場面C 自分が行う程度、適切性との相関

		自分	日本人	適切性	義務	自由
自分	国際	1	.070	.330**	.345**	.154
	法	1	-.003	.128	.436**	.050
適切性	国際	.330**	.239*	1	.241*	.498**
	法	.128	.213	1	.133	.248

** p<.01, * p<.5,

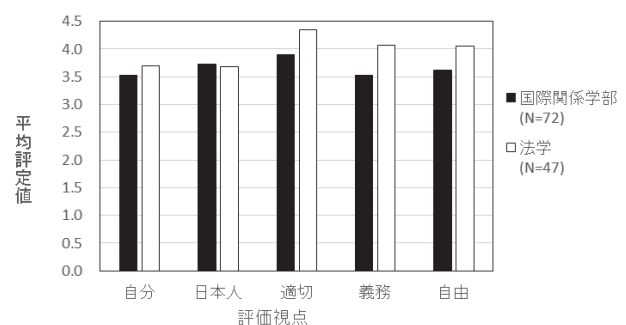
¹⁾「日本人」とは、典型的な日本人が行う程度の評定

よる2要因の分散分析を行った。

場面Aの相手優先行動(Fig.1)は、評価視点の主効果（ $F(4, 464)=8.334, p<.001$ ）、専門性の主効果（ $F(1, 116)=9.695, p<.01$ ）、交互作用（ $F(4, 464)=3.248, p<.05$ ）のすべてが有意であった。場面Aの相手優先行動を自由を守り、義務で適切であると考え、また、自分もそうするというのは、国際関係学部の学生より法学部の学生が高かった。この行動は、死刑に賛成する相手を受け入れる行動であることが影響していると思われる。死刑賛成という現行の法律と一致する意見を受け入れるのは、法学部では義務や自由を守り、適切で、自分もそうすると考えやすいのではないだろうか。場面Aでは、言動に不一致がある場優先行動や言動一致の自分優先行動は、評価視点の主効果のみが有意で、専門性の違いによる差はみられなかった。

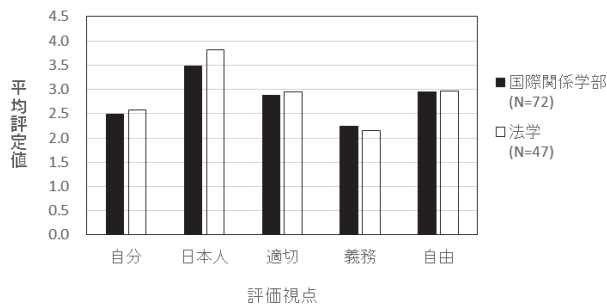
場面Aの場優先行動、自分優先行動、場面Cは、評価視点の主効果のみ有意であった（ $F_s(4, 464)=19.889 \sim 55.075, p_s<.001$ ）。これらの場面では、専門性の違いによる影響はみられなかった。

場面Aで相手と意見が同じふりをするなどの場優先行動(Fig.2)は、典型的な日本人が行うと思う程度に比べて、義務や自由を守らず、適切で



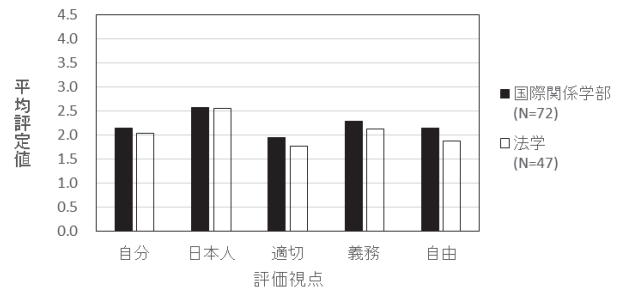
「日本人」とは、典型的な日本人が行う程度の評定

Fig. 1 場面A 相手優先行動



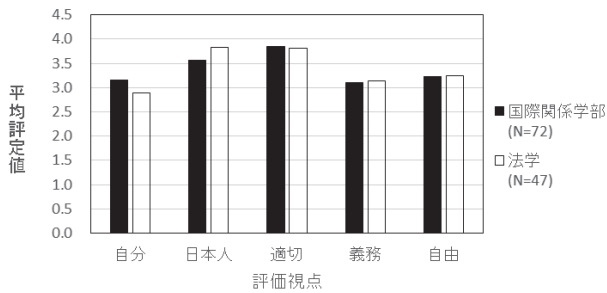
「日本人」とは、典型的な日本人が行う程度の評定

Fig. 2 場面A 場優先行動



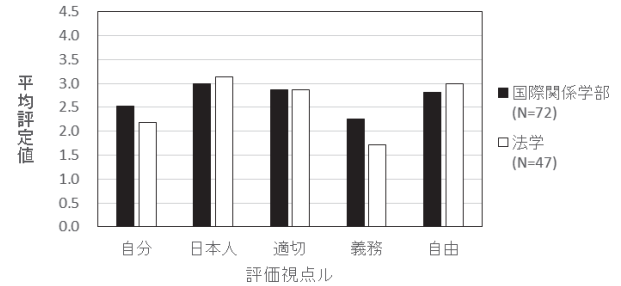
「日本人」とは、典型的な日本人が行う程度の評定

Fig. 3 場面A 自分優先行動



「日本人」とは、典型的な日本人が行う程度の評定

Fig. 4 場面B 相手優先行動



「日本人」とは、典型的な日本人が行う程度の評定

Fig. 5 場面C 相手優先行動

なく、自分が行うと思う程度は低い。また、場面Aで自分の意見を主張する自分優先行動 (Fig.3) は、適切であると思う程度に比べて、典型的な日本人が行い、義務や自由を守り、自分も行うと考える。しかし、平均点はすべて理論的中間点の3.00より低く、このような行動は不適切ではあるものの、典型的な日本人も自分も行うことがあると考えているといえる。

場面Bで相手を優先する行動 (Fig.4) は、典型的な日本人が行い、適切な行動であると思う程度に比べると、義務や自由を守らなかつ、自分も行わないと考えている。

場面C (Fig.5) では、評価視点の主効果 ($F(4, 464)=52.166, p<.001$) と交互作用 ($F(4, 464)=6.564, p<.001$) が有意であった。ルールを守らない相手を優先する行動を義務であり、自分も行うと考えるのは、法学部の学生より国際関係学部の学生が高かった。逆に、自由を守ると考えるのは、法学部の学生の方が高かった。場面Cの相手優先行動は、ルールを逸脱する行動であることが影響していると考えられる。

場面Aの相手優先行動、場面Cで判断に専門性

の違いがみられるのは、「法律」という枠組みの中で善悪を判断すると考えられる法学部と、異文化における多様な価値観を受け入れるという姿勢で行動の適切性を判断すると考えられる国際関係学部の専門性による違いを反映していると考えられる。

総合的考察

Iwao(1997) は、本音と建前のような言動が不一致な行動と言動が一致している行動という視点で、日米の好ましい行動の比較を行った。しかし、本研究の場面Aでは、言動が不一致の行動でも、「意見が同じであるかのようにふるまう」などその場を優先する行動と、「笑顔で話しを聴く」などの相手を優先する行動がある可能性が示唆された。

また、Iwao(1997) で使用された場面と同一の場面では、本研究の場面Bでは適切と考える行動とIwao(1997) で日本人が好ましいとした行動に違いのあるものがあつた。場面Bでは「内心、ショックで怒を感じるが、娘が連れてきた男性に笑顔を見せ、彼を楽しませようと努力する」行

動が本研究ではもっとも適切と考えられていたが、Iwo(1977)では、アメリカ人によってもっとも好ましいとして選ばれた1位であり、日本人にとっては、もっとも好ましい行動の3番目であった。また、本研究で2番目に適切と判断された「人種偏見を持っていないようにふるまい、笑顔で行動する」行動は、Iwao(1997)では、アメリカ人によってもっとも好ましいとされた2位、日本人によっては、1.9%のみが選択したもっとも選択数の少ない行動である。このような違いは、時代の相違とも考えられるが、本研究で示されたように調査対象者の専門性による影響があるのであれば、「日本人」とされた調査対象者の背景により、結果が異なる可能性がある。それは、「アメリカ人」についても同様と考えられる。

自分が行うと思う程度と義務と考える程度や適切と考える程度との間には相関がみられるが、典型的な日本人が行うと思う程度との相関は、ほとんどみられなかった。これは、周囲の典型的な日本人が行う行動にあわせて行動するというより、自分が義務と考えたり、適切と考える行動を行うことを示唆している。したがって、日本人が相互協調的な行動をとるのは、「他者が相互協調的な信念をもっている」と考える他者に関する信念が大きな要因であると考える橋本(2011)とは、必ずしも一致しない。しかし、このような判断には、場面や専門性の影響もみられた。

また、場面ごとの評価視点と専門性の2要因の分散分析において、場面により、専門性の影響がみられるものがあった。本研究で設定した場面Aは死刑制度に関するもの、場面Cはルール順守に関するものであった。それらは、本研究の研究対象者の専門性に関わるものである。調査対象者の知識・経験などの背景により同一文化内でも、適切と考える行動に違いがみられることが示唆された。この種の研究では、場面の選択は重要である。

【引用文献】

- 橋本博文(2011). 相互協調性の自己維持メカニズム 実験社会心理学研究, 50, 182-193.
- Iwao, S. (1997). Consistency orientation and models of social behavior: Is it not time for West to meet East? *Journal of Japanese Psychological Research*, 39, 323-332.
- Haidt, J.(2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, 108, 814-834.
- Kohlberg, R. (1971). From is to ought; How to commit the naturalistic fallacy and get away with it in the study of moral development. in T. Mischel (eds). *Cognitive development and Epistemology*. New York: Academic Press.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 大淵憲一・福島治(1997). 葛藤解決における多目標—その規定因と方略選択に対する効果— 心理学研究, 68, 155-162.
- 羅 蓮萍(2008). 社会的問題解決の方略と目標—中国と日本の大学生における比較分析— 東アジア研究, 6, 39-55.
- 山岸俊男(編)(2014). フロンティア実験社会心理学7 文化を実験する 社会行動の文化-制度的基礎

本研究は、平成26年度日本大学学術研究助成金（総合研究：課題番号 総14-001, 研究代表者 和田万紀）の補助を受けて行われた。

付録1 場面A

山本さんは死刑反対論者で、死刑反対の市民運動のリーダーとして活躍していた。鈴木さんは、山本さんの会社の信頼のおかげで同僚であるが、山本さんが死刑反対論者であることや、死刑反対の市民運動に参加していることを知らなかった。ある日、鈴木さんは、山本さんに自分の意見を話した。それは、「犯罪を削減し、社会を凶悪な犯罪から守るのに、もっとも効果的なのは、死刑を執行することだ。だから、死刑執行を躊躇してはいけない」というものだった。

付表1-1 場面A適切性評定

	国際関係学部(N=152)				法学部(N=92)				F値	
	アメリカ人		日本人		アメリカ人		日本人			
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	登場人物	交互作用
1 鈴木さんが話したことを聞かなかったふりをする	2.60	1.37	2.71	1.43	2.33	1.45	2.57	1.38	1.174	0.870
2 自分の意見を表明し、鈴木さんの意見を変えようとする	2.21	0.93	2.22	1.18	1.96	1.00	2.00	1.04	2.913 †	0.050
3 いつも通りの笑顔で、鈴木さんの話を静かに注意深く聞く	3.92	1.07	4.04	0.94	4.47	0.94	4.40	0.85	12.487 ***	0.048
4 その場にいる第三者に向かって「あなたは、私に賛成ですよね」という	1.87	0.89	1.77	1.04	1.66	0.86	1.68	0.84	1.527	0.089
5 鈴木さんと自分とは、意見が同じであるかのようにふるまう	2.73	1.25	2.92	1.30	3.13	1.12	2.77	1.25	0.599	0.291
6 鈴木さんについての自分の考えを変え、鈴木さんは信頼できないと思う	1.77	0.83	1.85	1.02	1.51	0.63	1.66	0.81	3.818 †	1.025
7 鈴木さんの言うことにも一理あると考え、自分の意見が間違っている可能性がある と考える。	3.78	1.01	3.78	1.02	4.20	0.87	4.30	0.81	13.761 ***	0.137
8 鈴木さんに自分の意見や自分の市民活動について話すことをやめる	2.95	1.06	2.99	1.14	3.18	1.27	3.49	1.23	5.696 *	1.291
	***	p<.001	**		p<.01	*	p<.05	†	p<.10	

付録2 場面B

佐藤さんは自分でも克服できない強い人種偏見を持っている。自分の愛する一人娘が同じ人種以外の人種の人と結婚することなど考えられない。しかし、ある日、娘が肌の色の異なる男性を家に連れてきて、この人と結婚すると紹介した。

付表2-1 場面B 適切性評定

	国際関係学部(N=148)				法学部(N=91)				F値		
	アメリカ人		日本人		アメリカ人		日本人				
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
1 内心, ショックで怒りを感じるが, 娘が連れてきた男性に笑顔を見せ, 彼を楽しませようと努力する。	4.08	1.08	4.09	1.05	4.53	0.73	4.30	1.06	6.224 *	0.7154	0.831
2 娘と彼に, 自分は結婚に反対であると, 率直に述べる。	2.73	1.26	2.47	1.20	2.36	1.07	2.66	1.34	0.331	0.0189	3.000 †
3 人種偏見を持っていないようにふるまい, 笑顔で行動する。	3.67	1.15	3.94	1.06	4.11	1.07	3.89	1.31	1.695	0.0374	2.645
4 自分では彼らの結婚を絶対に許さないと思っているが, 彼らに対しては結婚に好意的であると話す。	3.50	1.22	3.56	1.19	3.91	1.10	3.38	1.45	0.516	2.0397	3.150 †
5 率直に自分の不快感を表現する。	2.44	1.31	1.87	1.03	1.76	1.07	1.89	1.13	4.614 *	1.9367	5.257 *
	***	p<.001	**	p<.01	*	p<.05	*	p<.05	†	p<.10	

付録3 場面C

田中さんは、社会の一員としてよりよい社会を作るために、ルールや決められたことを守ることが重要であると考えている。ある日、親友の近藤さんとハイキングに出かけた。そこは、海岸線に絶壁が連なり、幾重にも岩礁が入り組んでいる、景色がよいことで有名な海岸だった。歩行者用の遊歩道が整備されていたが、安全のため遊歩道を外れて岩場に出ないよう注意を促す標識が立っていた。しかし、近藤さんは、遊歩道を外れて岩場の先端に出てみようと田中さんに提案した。

付表3-1 場面C 適切性評定

	国際関係学部(N=146)						法学部(N=92)						F値	
	アメリカ人			日本人			アメリカ人			日本人				
	(N=77)			(N=69)			(N=45)			(N=47)				
	平均	SD		平均	SD		平均	SD		平均	SD			
1 安全は自己責任と考え、近藤さんと一緒に岩場の先端まで行ってみる。	3.19	1.27		3.54	1.11		3.29	1.22		3.70	1.25		5.564 *	0.039
2 ルールを守るように、近藤さんを説得し、遊歩道に留まる。	3.43	1.07		3.21	0.99		3.24	1.25		3.34	1.18		0.028	1.167
3 安全に景色を楽しむため、遊歩道に留まるように近藤さんを説得する。	3.48	1.12		3.47	0.95		3.78	1.15		3.49	1.10		1.212	0.941
4 近藤さんの提案を聞こえなかったふりをして、そのまま遊歩道を進む。	2.58	1.29		2.28	1.03		1.91	1.18		2.11	1.17		7.269 **	0.122
5 遊歩道を外れないことはルールで決まっているわけではないので、近藤さんと一緒に岩場に出る。	3.08	1.26		3.15	1.07		3.13	1.12		3.38	1.13		0.889	1.065
	***	p<.001		**			p<.01			*	p<.05		†	p<.10